UNESCO ユースセミナーにおける多文化共修型「地球市民教育」

――文化，言語，民族を超えて共に学びあう――

小貫 大輔[*1]・星 久美子[*2]

はじめに

東海大学の教養学部は，2015年にユネスコスクール支援大学のネットワークに加わり，それ以来，特に神奈川県内のユネスコスクールを応援してきました。2018年度の「多文化子どもプロジェクト」では，ユネスコスクールへの支援活動の一環として第４回目となる UNESCO ユースセミナーを開催しました。UNESCO ユースセミナーとは，ユネスコスクールの高校生や教員たちが外国学校の高校生や教員たちと１泊２日で集う「多文化共修」の宿泊型セミナーです。2018年度のプロジェクトでは，これまでのユースセミナーから生まれてきた「多文化共修」のための様々なワークを紹介する冊子も発行しました。本稿では，私たちの UNESCO ユースセミナーでたいせつにしている「多文化共修」の在り方についてご紹介したいと思います。

UNESCO ユースセミナーの多文化共修とは

「多文化子どもプロジェクト」チームでは，様々な文化的背景をもつメンバーが集まり，その文化的多様性をリソースとして共に学び合うことを「多文化共修」と呼んでいます[1)]。ユネスコスクールは，どの学校も子どもたちに国際性を育てる教育に力を入れていますが，私たちのユースセミナーでは，私たちの身近に存在する「世界」について目を開くことをたいせつにしています。

神奈川県といえば，ペリーの来航以来，世界と深く交流してきた土地柄です。明治元年に最初のハワイ移民を送り出したのも横浜港でした。古くから様々な外国人コミュニティが生まれ，今もたくさんの外国学校（民族学校やインターナショナルスクール）が存在します。セミナーでは，毎年そういった外国学校から高校生や教員たちを招いて，神奈川県内のユネスコスクールや，ユネスコスクールへの加盟を検討している学校の高校生・教員たちと一緒に「地球市民」をめぐるテーマについて話し合ってきました。これまでに参加してくれた外国学校は，ブ

受理日2019年11月27日
＊１教養学部国際学科　＊２公益財団法人かながわ国際交流財団

ラジル学校，朝鮮学校，中華学校，トルコ系のインターナショナルスクール，南アジア系のインターナショナルスクールです。

ユースセミナーでたいせつにしていること

UNESCO ユースセミナーの参加者たちは，多言語・多文化の状況に放り込まれ，日本語，英語，ポルトガル語，コリア語，中国語などが飛びかう中，いろいろと戸惑いながらも文化や習慣の違いを肌で体験し，工夫しながら言語の壁を乗り越えて交流しています。知らない人との出会いは緊張も伴うし，誤解や行き違いが起きてはいけません。そのような出会いがどうしたら豊かな出会いになるか，みんなが対等な立場から参加できるにはどうしたらいいか。「多文化子どもプロジェクト」では，セミナーで「すてきな出会い」が起きるようにと心を配って準備しています。

多文化な背景をもつ参加者が対等な立場から参加し，それぞれに自分を主張しながらも対話の中で共に深く学ぶ。そのためにたいせつなのは「頭・心・体の３つを使うこと」だと意識しています。

●頭：「地球市民」としてたいせつな教養を身につける。毎年テーマを１つ選び，そのテーマについて考えるワークを準備して，講師を招いて詳しい説明を聞く。参加者同士で話し合って，たどり着いた結論を発表する。

●心：「地球のどこか」で起きていることや，「ずっと未来」に起きるかもしれないことであっても，他人ごとではなく，自分のこととして感じる「共感」の力を育てる。そのためには，実際に人と出会って，自分とは異なる人との「共感」を体験することから始める。

●体：文化が違えば，目線の合わせ方もボディランゲージも違う。無意識に人との関係もかわってくる。挨拶からして，体の使い方が千差万別。各国の文化を体で体験する。寝食をともにする。他の国の習慣にあわせた食事をしてみる。

企画する側にとっても，準備の段階から学びがたくさんあります。参加を予定する人たちにどんな特別なニーズがあるのか，事前に連絡をとって把握することを心がけています。文化や習慣，宗教，言語について調べるすばらしい機会にもなります。日本での「当たり前」が当たり前でなかったり，隠れた障壁や差別を発見したり，いろいろな気づきがあります。「多様性」のすべてに配慮したくても，予算が足りないなどして，どうにもならないこともあります。そんな中，私たちは100％を目指すのではなく，一緒に妥協点を見つけることがたいせつだと感じています。

●食事：例えばムスリムの参加者はハラールの食事でないと食べられない。そういう料理が調達できるように，近隣のエスニック店などをあたる。

●宿泊など：宿泊施設や公衆浴場の中には，外国人にフレンドリーでないところもある。日本の「大風呂」が受け入れられない文化もむしろ一般的なので，個別のシャワーが確保できるか確認する。

●使用言語：日本語，英語がどの程度通用するか，その他の言語や手話の話者はいるか，参

加者の中に通訳ができるメンバーがいるかなど，事前に確認する。

ユネスコスクールとはネットワーク運動です。でもセミナーのたった一度の出会いで，後にも続くような「つながり」をつくることができるでしょうか？　半日だけではもったいないし，時間が足りない。私たちは，最低でも１泊２日のプログラムにしようと考えてきました。

所属する学校をばらけて部屋割をした方が，いい結果につながるようです。高校生たちの部屋には大学生にも入ってもらいます。夜遅くまでお喋りをしても，翌日居眠りする人は誰もいません。「就寝前には，お互いの国で人気の曲を紹介しあい盛り上がった」というコメントは，日本人の男子高校生からのものです。他の部屋からもたくさん人が集まってきて，国や言語のちがいを越えて交流していました。教員・大人たちも，別の宿舎で盛り上がっているそうです。先生たちも，他校の教員と話をする機会は少ないことと思います。ましてや日本の学校と外国学校の先生が，柵を乗り越えて知り合うことは滅多にないのではないでしょうか。

寝食をともにするときに生まれる「プログラム外活動」が，長く続く「つながり」へと発展していくのを私たちは体験してきました。セミナーの後もユネスコスクールと外国学校の間で相互に訪問したり，大学生と留学生がおおぜいで一緒に参加校を訪問，文化交流をしたりということが続いています。2018年の春（３月29日～４月２日）に「“社会イニシアティブ”世界フォーラム」という宿泊型の国際会議が開かれた際には，それまでのユースセミナーの参加者たちがスタッフや一般参加者として合流して，海外からの参加者と交流する機会もありました。

多文化共修のためのワークのアイデア集を発行

これまでの UNESCO ユースセミナーを通じて，文化背景が多様なメンバーが共に学ぶときに使えるたくさんのワークが生まれてきました。言葉の壁を乗り越えて関係をつくるためのアイスブレイクや，チームビルディングのためのワークなど，アレンジ次第で小学生から大人まで，幅広い年齢を対象にすることができるものです。2018年度には，それらをまとめた「アイデア集」を冊子の形で発行しました[2)]。以下は，その冊子で紹介したいくつかのワークの例です。

●ライン・アップ！：ボディランゲージだけでコミュニケーション
●好きなもの BINGO：次から次へとたくさんの人と一対一での会話をする
●人探しゲーム：参加者の中にどんな人がいるかを知るゲーム
●多文化○×クイズ：参加者の文化，言語，民族的背景を知るゲーム
●写真ジグソーパズル：仲間を探してパズルを完成し，グループをつくる
●出身国（学校）紹介フォト集め：どんな参加者が，どんな出身国（あるいは学校）から来ているのかを知る
●多文化フォトランゲージ：一枚の写真をじっくり観察することで，知らない世界や文化に思いをはせる
●多文化あいさつリレー：おじぎ，握手，ハグ…世界のあいさつを体験！　ゲーム形式で「照れ」を克服

2018年度の活動で発行した多文化共修のアイデア集（平成30年度日本／ユネスコパートナーシップ事業委託により作成）

おわりに

多文化化がすすむ日本ですが，一般の若者たちが国籍や言語を越えて同世代の人たちと出会う機会は多くありません。たとえ同じ町で暮らしていても，公立・私立の「日本学校」と，外国学校やその他のオルタナティブ学校の生徒たちが出会うチャンスはほとんどないのではないでしょうか。第一印象が人のイメージを形づくるように，ある文化との最初の出会いを取りもつ責任は重大です。言語や民族，文化，習慣の異なる人たちが一緒に学ぶためには，しっかりとした準備と，しっかりとした心構えが必要です。2018年度に発行した「アイデア集」では，セミナーを通じての私たちの経験と，そこから生まれてきた多文化共修のワークを紹介しました。学校現場でも使えるようなアイデアが満載です。興味のある方はぜひ本学教養学部「多文化子どもプロジェクト」までお問い合わせください。

注

1）坂本利子・堀江未来・米澤由香子（2017）『多文化間共修：多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社に詳しい。

2）東海大学 UNESCO ユースチーム（2018）『多文化共修のためのワーク～文化，言語，民族を超えて共に学びあう「地球市民教育」アイデア集』東海大学教養学部（平成30年度日本／ユネスコパートナーシップ事業委託により作成）